

鈴木広の社会学 その2：社会科学から社会学へ

——東北大学文学部社会学研究室での学び——

三浦典子

はじめに：先を読む力

鈴木広先生の学問的な魅力は、漠然としたものではあるが、「先を読む力」であるといえよう。「不思議ですね。僕が10年以上前に言っていたことを、その時は誰も見向きもしなかったのに、今頃になって皆が言い始めている」と、いろいろな場面で言われていたことを思い出す。

たとえば、日本社会学会が「日本社会の現状分析」をテーマに企画してきた成果の報告が、「特集 日本社会の現状分析」として『社会学評論』に収録されており¹⁾、鈴木先生は、1982年度のシンポジウムに登壇した、森岡清美「日常生活における私秘化」、元島邦夫『競争社会』における社会関係とライフ・スタイル」、井上俊「文化の『日常化』」の3報告に対する総括論文として、「たえず全体化する全体性と、たえず私化する私性」を執筆しておられる。

3報告は、それぞれ「家族（日常生活）」「企業（職場生活）」「文化」に焦点が置かれた社会の「現状分析」であるが、鈴木先生は、3報告には、最も基本的な傾向として「私化」が進行しているという共通認識がある、と総括しておられる²⁾。すなわち、それぞれの研究分野の現状分析から、私化（privatization）が広く取りざたされていることがわかる。

しかし、鈴木先生はすでに「土着型社会の流動化をめぐる政治状況——都市近郊地域における生活構造の変質過程——」（『哲学年報』27輯、1968年）において、社会体制と私生活行動との関連の仕方が、「たえず全体化する全体性（サルトル）」と「たえず私化する私性（privacy）」との両極化の進行という形で変化していることを提示しておられる。日本社会学会のシンポジウム報告から10年以上も前ということになる。

現代社会の特徴として広く取りざたされている私化は、多くは自己中心主義が浸透していく過程にみられるものであるが、鈴木先生が指摘された私化は、現代社会の変動の特徴として、私化が全体化と同時に進行していくことであって³⁾、私化だけの指摘では薄っぺらなものに写っていたに違いない。

また、A. コントの社会学は「予見するために見る」ところに存在意義があることを、時折強調されていたように、先生の先を読む力は、社会学の存在意義として位置づけられていた。

先生の先を読む力は、社会学的学問の蓄積の上に形成されていったものであることは言うまでもないが、おそらく、成長期にその素地は形成されていたように思われる。

鈴木先生は北海道函館市の出身であるが、先生の先祖には北海道開拓の父として銅像もある方がおられるように伺ったことがあり、幕末か明治期に、北海道に渡られたルーツをもっておられる。北海道大学で日本社会学会が開催された折に、初めて北海道に渡るものがほ

とんどであった研究室で、どのようにして札幌に行ったらいいかということが話題になったことがある。その時に先生は、飛行機でいきなり札幌に行くのではなく、まず、函館にわたり、徐々に内陸部に入っていかなければ、本当の北海道はわからないことを強調された。残念ながら、その真意を確かめる機会を失ってしまったが、開拓の地北海道に深い思い入れがあったことは事実である。加えて、士族の出であることにプライドをもっておられた様子もうかがわれたことから、おそらく「開拓精神」や「進取の気性」は、そのルーツからの DNA としてもっておられたのではなかろうか。

また、どのくらいの期間かは聞きそびれたが、函館では修道院におられたことがあるという。ある時、冗談のように、「先生の歌がお上手なのは、ひょっとして修道院で少年合唱団に入っておられたからではないですか」と聞いたところ、それにはこたえられず、「小学校のころ、クラスに歌がうまいヤツがいて、三橋美智也ではないかと思うのだが、彼は、しょっちゅう巡業に出ていて、あまり学校には来なかった」と言われ、「ぼくのほうが歌はうまかった」と、はぐらかされてしまった。

確かに先生は歌がお上手で、なかでも石川啄木の詩に曲をつけられた「初恋」をよく歌われていた。石川啄木は、短期間ではあったが函館で代用教員として住んでいたことがある。学会や研究会の後にみんなで出かけた飲み屋で、「初恋」がカラオケに入っていない時にはアカペラで、また、先生の歌を聞くあらたまった場が用意された折には、教え子の坂口桂子さんのピアノ伴奏でよく歌われていた。

函館に関しては、第二次世界大戦中、勤労奉仕で函館空港の滑走路づくりに駆り出されたとかで、「函館空港は、ぼくらがつくったようなものだ」とも言っておられた。

その後、北海道を出て、本州にわたり旧制弘前高校に入学し、昭和 24 (1949) 年 4 月に東北大学に入学された。弘前の地で培われた経験も大切にしておられたのであろう、九州各地でまわりもちで開催される「九州寮歌祭」には毎年のように出席され、「今年は、弘高出席者は何人だった」と言われており、年齢とともに参加者が少なくなることを気にしておられた。

ところで、昭和 22 (1947) 年の教育基本法・学校教育法制定により、東北大学は昭和 24 (1949) 年 5 月に、新制東北大学となった。入学した大学が、学制の変化によって、卒業する時には新制の大学となったことを残念そうに言っておられたことからすると、本人の意思にかかわらず、学制の変化という社会の変化によって振り回されるという体験になったようである。

東北大学では、学部生、大学院生、助手を経て、昭和 34 (1959) 年に九州大学文学部に講師として着任された。自分は、「日本の北から南に流れてきた」というような言い方をされていたが、長い距離の地域移動の経験が、その後の社会移動研究の根底にあるといえる。

以上は、根拠のない推測の域を出ないものであるが、先生の「先を読む力」は、個人を取り巻く社会の変化に、常に目を向けてきた、あるいは向けざるをえなかった生活体験の中で育まれたのではなかろうか。そしてその受け皿に、その後学んでいった知が蓄積されて形成

されたのではなかろうか。

前置きはこれくらいにして、さっそく鈴木広の社会学が形成されていった過程を解明していく本論に進んでいきたい。

本論執筆にあたり、まず、東北大学時代に執筆された先生の論稿のうち、入手可能なものすべてに目を通した。また、東北社会学研究会が恩師新明正道先生の追悼特別記念号として発行した『新明社会学とその周辺』に収録されている、森博氏による「社会学研究室小史」や、対馬貞夫・田原音和・鈴木広氏による対談「総合への意思」も、東北大学時代の鈴木先生の学びを知るために参照した。加えて、先生自身が「久留米大学退職を記念する謝恩会」（2006年3月5日）において、出席者に記念品として渡すために作成された『社会学事始め』（非売品）も、社会学を志した時の事情や先生の心境を知るために大いに活用させていただいた。

1. 東北大学における社会学との出会い

(1) 東北大学社会学科のはじまり

東北大学は東北帝国大学として、明治40（1907）年に創立された。当初から専門学校や高等師範学校の卒業生にも入学の機会を開き、「研究第一」「門戸開放」「実学尊重」の理念を掲げていた。明治44（1911）年に理科大学が開設され、大正2（1913）年に、日本の大学として初めて女子の入学を許可したことはよく知られている。

大正11（1922）年に法文学部が設置され、3年目の年の9月に、社会学科が設置されたとのことである。のちに、E. デュルケムの『自殺論』の翻訳でも知られる、宗教学の鈴木宗忠教授の兼担で、最初の社会学の講義は開始された。正規の社会学教授として、ケルン大学のマックス・シェラーを迎える案が進められてきたが、シェラーがフランクフルト大学に任命されたことによって、この案は消滅した。結果的に、大正15年（1926）年4月に、関西学院大学の新明正道教授が、社会学の助教授として東北大学に着任し、ここに東北大学文学部社会学科の歴史が始まることになる⁴⁾。

ところが、第二次世界大戦後、昭和21（1946）年9月に、新明先生は公職不適格の判定で教壇を去られた。その後昭和26（1951）年に大学に復帰されてから、中断はあるものの退職されるまで、30年以上にわたって一人で東北大学社会学の講座をうけもってこられた。このような大学は珍しく、鈴木広先生はじめ、この間の文学部社会学専攻生はみな新明先生の弟子ということになり、結果的に、東北大学社会学研究室は、先輩、後輩に囲まれて学問を進めることができる、ある種の仲間社会的な教育環境が用意されていたことになる。

(2) 東北大学入学とイールズ事件

鈴木先生が昭和24（1949）年に東北大学に入学された時、新明先生は公職追放中であつたが、東北大学では、いわゆる「東北大学イールズ事件」が起こった。新制度の大学が発足した直後の昭和25（1950）年、戦後の大学制度改革を主導した連合軍総司令部教育局顧

問 W. C. イールズが、共産主義的思想を大学から排除しようとする反共講演会を、全国の大学を回って行うことになり、東北大学では、昭和 25 (1950) 年 5 月 2 日に開催される予定であったが、学生たちの抗議で講演会は流会になったという事件である。

鈴木先生が入学して 2 年目の出来事で、先生は、「当時、学友会の『社研 (社会科学研究会)』の世話人をしていて、その仲間も抗議学生の中にいた」⁵⁾ と述べられており、先生は学部時代、一定程度、学生運動にかかわり、マルクス・エンゲルスを中心に、社会科学の文献を読みあさっていたとのことである。そのような立場からすれば、社会学、いわゆるブルジョア社会学は批判の対象であり、その批判を克服する社会学理論の模索が、学部学生時代の関心であったという。

すなわち、社会学者鈴木広が誕生するまでは、マルクス主義社会学者鈴木広であったわけである。鈴木先生に限らず、この時期の社会学者の多くはマルクス主義に親近感をもっていたことも事実である。

(3) 新明正道先生との出会い

前置きはさておき、新明先生が公職追放中で大学に不在の間は、社会学の授業は、社会政策論の服部英太郎教授が兼任されたが、昭和 22 (1947)、23 (1948) 年は、学習院大学の清水幾太郎教授が来校して講義やゼミを担当され、昭和 24 (1949)、25 (1950) 年は、東京大学の林海海教授が講義を兼任された。社会学科の学生指導は、宗教学の石津照璽教授が当たられ、新明先生は自宅で学生の指導に当たられていたようである⁶⁾。

鈴木先生が学部の専門課程に進学した年度の後期に、新明先生が大学に復帰され、最初の授業は「社会学史」の講義であった⁷⁾。もちろん、鈴木先生はこの講義を受講しておられるが、講義では、次々にいろいろな社会学者の理論が紹介されたが、新明先生はそのいずれにも批判的であったことに対して「あらゆる学説を次々に全部批判する『批判社会学』ですね。私の好みからいえば、批判よりもむしろできるだけとりいれたいと、いつも思っている」⁸⁾ と、不満を述べておられる。新明先生がいろいろな学説に対して批判的であったのは、自らの総合社会学を模索されていた時期であったからではなかろうか。

新明先生の復帰を祝って、昭和 26 (1951) 年 11 月 27 日に「新明先生を囲む茶話会」が開催され、鈴木先生は学生として出席されている⁹⁾。結局、鈴木先生は、学部 2 年、大学院 5 年、助手 1 年の 8 年間、新明先生のもとで研究をすすめられ、自ら「まるまるの教え子」と述べておられる。そして昭和 34 (1959) 年に、九州大学文学部に着任された。

他方、新明先生は、昭和 36 ((1961) 年に定年を迎えられ、1 月 28 日には「決別講義」が行われたとのことである。

(4) 新明先生との対峙

新明先生は、東京大学の学生時代、政治学者吉野作造を顧問とする「東大新人会」に所属しておられた。新人会は、いわゆる社会主義的の学生団体であった。したがって鈴木先生は、

新明先生も自分と同じような価値観をもっておられるのではなかろうかと、新明先生に対して、「私も人並みに社研なんかやってて、単独講和反対とか、レッド・ページ反対」という話をされたところ、新明先生はあまりいい顔をされず、鈴木先生にとっては期待外れであったようである¹⁰⁾。

また、自らの社会学を模索しておられた鈴木先生は、新明先生の総合社会学とはどのようなものかを探るために、いろいろな形で、新明社会学に対峙しておられる。

たとえば、新明先生は政治学出身でありながら、関西学院大学に赴任されてから社会学をも担当されることとなり、社会学を学び始められた。そのことから「新明先生にとっては、社会学と政治学とは最初から、『総合』というか混合というか、同質のものだった」と、鈴木先生は述べておられる。さらに、「私自身は逆でして、社会科学から異質なものとして社会学を、かなり苦勞して、切り出してきた」¹¹⁾と、新明先生との立場の違いを強調しておられる。

この時点での新明先生の総合社会学に対峙して、鈴木先生は「総合社会学とは、マルクス主義を内容とし、形式社会学を形式とする『総合』であるというのが、大学院時代の大雑把な仮説だった」¹²⁾と振り返っておられる。

2. 社会学理論の探求

(1) 卒業論文と大学院進学

マルクス主義と新明先生の総合社会学のはざま、鈴木先生は「マキーヴァーの社会変動論について」と題して 150 枚余りの卒業論文を執筆された。卒業論文そのものの全体像は不明であるが、問題意識は、社会学はマルクス主義にどれほど対抗できるかにあり、当時の東北大学社会学研究室の教育環境においては、論文は理論的に論述するものであると思い、社会学の「きわめて標準的な（と見えた）マキーヴァーに取り組む決意をかためた」とのことである。当時、マキーヴァーの本はほとんど翻訳がなく、*Community, Social Causation* を全部ノートに訳出し続けたとのことである。「この作業は、社会的な思考方法を体得する上で役に立ったが、それでもマルクスのマインド・コントロールから、脱出したとは思えなかった」と回想しておられる。

筆者が学生時代、新明先生が九州大学に集中講義に来られ、講義の中で鈴木先生の卒業論文について触れられたことがある。「鈴木君の卒業論文は共同体論で、マッキーバーとマルクスを比較して、若干マルクスに分が良かった」と言われていた。

鈴木先生は、卒業論文を提出して卒業後、公立高校の教員の採用が決まっていたので、郷里の函館にもどる予定であったが、新明先生が、「この校長さんは知っている人だから、手紙を書いてあげる。それを持っていけば承知してくださるだろう。君は大学院に残ったほうがよいのではないか」といわれ、大学院への進学を決めたとのことである¹³⁾。

新明先生は、鈴木先生の卒業論文を読まれて、先生が大学院に進学して社会学者となる姿を先読みして、期待しておられたことがよくわかる。鈴木先生の先を読む力は、新明先生か

ら学ばれた部分もあるように思う。

(2) 修士論文：機能論的社会理論の検討

大学院に進学して、本格的に社会学の「仕事」を始めるにあたって、鈴木先生は、①マルクス主義との関連でマンハイムを中心とする知識社会学、②マキーヴァーとの関連でコミュニティの実証的研究、③マキーヴァーの「機能体系」という概念との関連で、いわゆるファンクショナリズムの諸理論の研究の、3つの課題を立てたとのことである。

そのうちの第3の課題を「修士論文」のテーマとされた。「修士論文」では「マリノフスキーに始まり、ラドクリフ・ブラウン、マートン、パーソンズに至る機能理論の展開を追い、マキーヴァーの機能体系としての社会体系概念を照準としつつ整理した」¹⁴⁾と述べておられる。

修士論文の概要が、『社会学評論』に投稿された「機能論的社会理論の展開」である。機能という名は、B. マリノフスキーが最初に作り出したといわれるが、マリノフスキーやA. R. ラドクリフ・ブラウンらの社会人類学における機能の概念と、マートンやパーソンズらの社会学における機能の概念とを比較検討しながら、R. M. マッキーバーの制度複合という考え方にたどりついておられる。

マッキーバーによると、関心の内容から各種の結成集団(アソシエーション)が成立する。歴史的にみれば、中世における国家と教会や、近代における銀行と政府との統合にみられるように、政治と宗教、経済と政治とは不可分の複合をなして現れ、これらの制度的・集団的な相互連結が「制度複合」である。

さらに先生は、マッキーバーが「有機体が内包している諸器官が、それぞれの機能を果たしながら相互に活動をしながら『生活体』を存続させているように、『社会』を構成する諸要素は、単に並列的に存在するのではなく、各々独自の社会的機能を果たす場合に、独自の相互調整を示す」というように、「総合社会学的」な立場から機能体系の概念を規定している点を評価しておられる¹⁵⁾。

加えて、マッキーバーの理論は、パーソンズの理論よりは歴史的にとらえられている点ですぐれており、個人行為者の次元に分解される集団間の関係やその体系的位置の問題をも巨視的に検討しようとしている点で、機能主義の欠陥を補足し、より総合的な見地を示している、とも述べておられる。

また、マートンの機能分析は、マルクス主義が遂行している批判的な社会理論に接近するもので評価できるとしながらも、すべての機能理論に共通して、唯物史観という根本的な見地は欠けている。さらに、マートンの潜在的機能の順逆性の規定を評価しつつも、この視点は、巨視的な分析を特徴とするマルクス主義の方が先んじており、歴史的社会的考察にとっても問題がある¹⁶⁾と、ここでもマルクス主義へ傾斜したまとめをしておられる。

(3) 地域共同体の理論：経済史学と社会学

一方、東北大学社会学研究室では、昭和 26（1951）年以降、新明先生が科学研究費を取得されて、実証的な調査研究が進められていった。新明先生は理論畑で研究をしてこられ、地域調査に当たって理論的な枠組みを示されることはなく、学生たちは「結局、我々が自分で、おのがじし、暗中模索でやることになった」¹⁷⁾ ようである。

鈴木先生は「江ノ島、小牛田、白石、釜石、八戸と調査をやっていきましたが、みな自己流ですから、とても楽しく、やり甲斐があり、また悶々としていたことも確かです。理論畑で育ったと思っているもんだから、理論の勉強も当然、やらなきゃならんですしね」¹⁸⁾と、地域調査にかかわりながら、地域社会に関する理論的考察も進められていった。

鈴木先生は、博士課程に進学して「村落研究会」に入会された。当時、学会での論争の中心的なテーマが「共同体論」であったことから¹⁹⁾、村落共同体に関する理論を整理していかれた。それが、「共同体の基礎問題」（『社会学研究』14、1957年）や「共同体の理論」（『文化』第22巻3号、1958年）であり、昭和34（1959）年の村落研究会『村落共同体論の展開』（時潮社）に収録されている「共同体の基礎概念」である。

「共同体の基礎問題」は、第30回日本社会学会の報告をもとに執筆されたものである。共同体に関する論点は、社会学と経済史学とにかかわり、一つは、日本の農村の民主化であり、もう一つが、現実の農村を全体社会の体制的な枠組みの中で正確に認識することであった。「共同体の基礎問題」では、共同体研究の歴史社会的視角や共同体の社会体系的位置づけを考察しておられる。

まず、中村吉次について、「煙山調査」は村落社会の歴史的分析を行ったものであり、「共同体」は、原始的氏族共同体に発し、生産力の発達によって契機ごとに分散し、近代にいたって分解し解体する前近代的生産関係としての同族結合体であるとされている。

それに対して、鈴木栄太郎の「自然村」は、村落研究の中心概念で、明治中葉の町村合併前の旧村の範囲内に、もろもろの社会集団や社会関係の累積を基盤とした精神としての自律的作用に本質をもつものであるとされている。

中村のように、共同体を前近代的なものとして、それが解体しなければ近代が成立しないと考えるのは、経済史学の見解である。しかし、共同組織を前近代的と限定する必要はないのではないか。マルクスの「生産において人間は自然にはたらきかけるのみでなく、相互にはたらきかける」という生産関係の規定を特定化して、人間の自然に対する適応における地域的社会構造の統体は、あらゆる種類の集団・家族・個人間の生活関係を考える「自然村」の考えをもとに研究することが望ましいと、鈴木先生は述べておられる。

すなわち、村落共同体を前近代的、コミュニティを近代的と区別するのではなく、社会学的には経済以外の綜体が問題で、村落共同体もコミュニティの一種類であり、コミュニティ一般を共同体と呼んでさしつかえなく、マキーヴァーのいう、地域的に成立する共同生活と共同意識の相対的に統合した範囲ととらえる規定を採用してもよい、と締めくくっておられる。

「共同体の理論」は、その続編として書かれたものであり、まず、社会学的概念としての共同体は、人間の集落生活が、集団の生活共同的な性質と、集団の居住地を媒介とした関連性を必須要件としている、と規定しておられる。

また、共同体の内容は、生産関係と生活関係としての生活単位の集落的連合であり、生産組織とその他の社会組織（親交圏、祭祀集団、諸行事、通商圈、関心結合、諸集団とその錯綜関係、政治組織などなど）とを総合的に把握する必要があり、共同体の研究は、共同体を住地関連にもとづく機能体系として、共同生活の各側面の全体関連において認識しなければならないとする立場をとっておられる²⁰⁾。

さらに、「共同体の基礎概念」において、精神＝規範意識が、共同体を機能的な統一に向づけているが、生産活動という側面における構造＝生産関係が、機能的な統一の在り方を規定しており、下部構造の変化に応じて上部構造が変化することが可能なのは、共同体の構造に行動主体となる個人と集団の結びつきがかかわってくるからであると述べ、個人が参加するから全体としての共同体も適応機能を果たすことが強調されており、のちの「媒介過程」につながる見解が示唆されている。

さらに、共同体は、機能的関連の地域的統一の範囲とみるとともに、階級社会＝国家の成立以降は、共同体内部を権力構造との関係を中心とする外部とのつながりのなかでとらえるべきで、外部とのかかわりが成立する事情も、生産力の一定の発達段階に照応すると述べておられる。

鈴木先生による、このような地域共同体の概念整理は、のちの「釜石調査」の理論的分析枠組みとなる「都市研究における中範囲理論の試み」に引き継がれている。

(4) 「マンハイム研究」のゼミにて

前述したように、新明先生が大学に復帰された最初の講義は、「社会学史」であった。専門課程に進学した鈴木先生は、この授業を受け、「その時のノートをあけてみると、第1章、社会学の近代的起源、第2章、社会学の体系的確立、第3章、社会学の発展、となっている。岩波版の新明正道『社会学史概説』（1954年）とほぼ同じ構成であるが、講義では第4章つまり「現代における社会学の展開」という1920年代以降のところは、おそらく時間切れで、文化社会学とくに知識社会学については、ついに解説されなかった。ノートも、ジンメル、ウェーバーあたりでほぼ終わっており、マンハイム、シェラーはノートの最後のページに、文字通り一言ずつ出ているだけである」²¹⁾と述べておられる。

新明先生の授業で、先生の口から直接知識社会学について聞いたのは、大学院の「マンハイム研究」というゼミであったとのことである。このゼミで学生たちは、1年間、マンハイムの論文を次々に受け持って、それを解説し、自分なりに問題を提起し、話題を提供した。

鈴木先生は、「歴史主義」と「イデオロギーとウトピー」の中の「政治学は学として可能か」の2論文を受けもたれた。

鈴木先生によると、マンハイムという思想家は嫌いではない。成否は問わず、悪戦苦闘し

て支配イデオロギーと対決し、独自に主体的な状況突破の方向を模索し続けている。そういう苦心のプロセスが比較的わかりやすく、時には見え透いたトリックもあるが、努力の跡は歴然としているところに魅力を感じる。しかし、言うことが漠然としており、「現代的文化総合」「相関主義」「動的思惟」など、肝心なタームが曖昧であるのに困った、とのことである²²⁾。

驚くことに、大学院のマンハイム研究のゼミで「政治学は学として可能か」について報告した時のメモが、先生の手元にあるとのことである。そのメモによると、

- ① マンハイムは政治的行為の学の可能性を探求しているようであるが、結果としては、政治的知識の学（知識社会学）の可能性を論証している。
- ② 行為は知識にいつの間にか変容しているが、それは行為（実践）に含まれる非合理的要素が捨象されていくことである。
- ③ その変容に対応して、学の性質も変容し、それは実践的行為のための学ではなく、行為についての知識についての学となる。
- ④ だからこそ、決断はますます後へ向かって押し戻されるという政治的知識の根本的運動形式がとり出され、知識人との適合的連関が注目される。「政治の合理化」が主要な文脈になっている。

このメモにもとづいて、鈴木先生が、行為の非合理的要素とは、マンハイム自身が社会主義やファシズムの分析にあたって強調しているものであり、明らかにリベラル派である。「教養」の概念や、社会過程における総合なくして、思惟のみを総合しようとする主張は無理であるなど、定石通りに指摘したところ、それに対して、新明先生は長時間にわたって否定的に反論されたという。それは驚くほど拒絶的で、びっくりした。つまりマンハイムを強く弁護されたと記憶しているとのことである²³⁾。

その時のことを、ゼミ生たちも記憶しており、鈴木先生は、「マンハイムのゼミで、ちょっと安易なできあいの答えをいってしまったので、こっぴどく叱られた」²⁴⁾ と、振り返っておられる。

のちに、鈴木先生が、学生であるわれわれに対しても、悪戦苦闘しないで、通り一遍のありきたりの意見を述べることを極端に嫌われていたのは、この時の経験が大きかったのではなかろうか。

そして先生自身も、マンハイムと同じように悪戦苦闘しなければわからない、すぐれた論理がマンハイムの体系の中にあるに違いない、「読みの浅いわれわれ初心者にはそれがシカと見えないのではないかという思いを捨てきれないでいた。それをとことん突き詰めようとしていたら、その後の私も今はかなりちがった方向をたどったかもしれない」²⁵⁾ とも述べておられる。

ここでは、これ以上深く考察していかないが、大学院の「マンハイム研究」のゼミの直接的な成果といえる初期の論文に、「時代診断学の構造」（『文化』第19巻第6号、1955年、645-663頁）と「イデオロギーとウトピーの概念構成について」（『社会学評論』8巻1号、

1957年、50-54頁）があり、「世代の問題」の翻訳（鈴木広・田野崎明夫訳『世代・競争』誠信書房、1958年、2-113頁）がある。そして、鈴木先生は、『新明正道著作集 第6巻 知識社会学』が刊行されたときに、新明先生の知識社会学に関する「解説」を書いておられる。

マンハイムとの格闘は、マルクス主義社会学者鈴木広が、社会学者鈴木広へと進化していく契機となったことは疑いない。

後に、講義の中での疑義に対して質問するために鈴木先生の研究室を訪ねた折に、どのような脈絡であったかは定かに記憶していないが、突然、「マンハイムの相関主義という概念は大変重要です。どのような意味かわかりますか」と、逆に質問されたことがある。きちんと答えられたかどうか自信はないが、先生にとってマンハイムが重要な先達であると思ったことは事実である。

(5) 理論と実証：中範囲の理論

鈴木先生によると、新明先生は政治＝社会学者で、鈴木栄太郎の「自然都市」重視に批判的で、「行政都市」の意義や機能を取り上げようとしておられたようである。多くの社会学者は政治や行政に対して異和感を持つが、新明先生は政治や行政に異和感をもたないで同質化し、「全体的認識」を強調され、新明先生の考えの中には、社会＝部分、政治＝全体という図式が「総合」の実体としてのぞいており、政治は実践の世界であり、社会学は社会観の基礎づけをするものだと「総括」されていたような気がする、と述べておられる²⁶⁾。

それに対して、先生は、実践に先だって、まず正しい現状分析をやって、そこから戦略戦術が引き出されてきて、権力者だけでなく多様な生活者の集群それぞれの動きの中に、方向を見出してリーダーシップを機能させようとしなければ、現状分析のない実践となると考えていたとのことで、鈴木先生がマートンを評価するのも、その反省からだと言っておられる²⁷⁾。

先生が学生の頃、マートンは読まれはじめており、理論と調査の相互媒介という今ではあたりまえのことが、とても新鮮に感じられたとのことである。というのは、当時の日本の理論社会学は、普遍化的認識をする一般社会学だけしかなかったからである。「新明先生は、科学研究費はよく取ってくださったが、理論枠を示して調査を指導することはなく、我々にとってはそれが非常に大きなレーテント・ユーファンクションだったんですね。それは大いに感謝するところですね」²⁸⁾と、振り返っておられる。

すなわち、理論から実証に日本の社会学の重点が移っていく時期に、理論をベースにして育った学生たちが、自由にフィールドで作業し、大所高所の枠組みを実際にどう肉付けするかを、自分たちの責任で考えていかざるをえなかったという、研究室の潜在的な教育的効果は大きかったようである。

以上が、鈴木先生が東北大学社会学研究室において、社会学理論の考察を深めながら、理論を実証研究へと橋渡しするところまでに到達された過程である。先生自身が、のちにプロフィールドで語られた「はじめ、Mannheim、MacIver、Malinowski、Merton、Parsonsら

の学説研究に従事」²⁹⁾の实体である。

3. 東北大学社会学研究室における実証的共同研究

(1) 漁村地域の調査

東北大学社会学研究室においては、新明先生が大学に復帰されて以降、文部省の科学研究費によって、農村地域の調査研究が進められていった。最初の調査研究のまとめが、『社会学研究』第10号（1955年）に「特集 漁村の調査研究」として収録されている。

漁村調査は、昭和28（1953）年7月より1か月間かけて、宮城県女川町塚浜部落で行われ、調査の報告は、菅野正・森博「地先漁業村の部落構造」として、また、昭和29（1954）年度の助成金によって宮城県女川町竹浦で行われた調査の報告は、田原音和・佐々木交賢・白土吉太郎「漁村における階層と親交圏」として、同じく昭和29（1954）年度の文部省科学研究費により女川町江島で行われた調査の報告は、斉藤吉雄・鈴木広・加藤恒子「漁村共同体の分析」として発表されている。この特集には、佐藤政雄の新潟県西頸城郡筒石の調査報告も含まれている。

特集号の編集後記を田野崎昭夫研究生（当時）が書いているが、「本号は漁村調査特集号と銘打って、現在まで当研究室中心に行ってきた漁村調査の成果を、一応活字にオン・パレードしてみた。ただ、これだけの小論に論者の名が2人も3人もつらねているのは多少目ざわりでもあり、あるいは奇異にも思われるであろう。これは調査が仮に企画や指導は特定の人を中心となることがあり、又協力の程度に多少の差はあるにしても、作業の遂行は結局は共同の力のたまものである」³⁰⁾と述べているように、当時の社会学研究室では、新明正道教授、対馬貞夫助教授、菅野正講師、田野崎昭夫研究生を中心に、大学院生や学生がともに調査に参加して、共同研究を行っていた様子がよくわかる。

ところで、鈴木先生たちが執筆された「漁村共同体の分析——宮城県女川町江島——」の総合的な焦点は、この部落の共同性となる結合的な行為連関の分析と、これが具体的に表れている種々の相と、それが果たしている機能とを問題とするところにあるとされている。論文は、共同執筆であるが、直接執筆にあたったのは鈴木先生であることを「注」に述べておられる。

その論文によると、江島は、調査当時の戸数は152戸で、島の人々はほとんど漁業に依っている。島内の諸々の集団的結合の因子は、血縁関係をもととしながら、「気心の合った」水平的友人的形態が支配的である。

漁業は、地先小漁、鮫刺網組、鰹船乗組の3つの形態をとっており、地先漁業は全戸が参加し、鮫刺網組には112戸が参加し、おのおの14戸からなる8つの組からなり、各戸は平等に網を提供し、労力は1名宛で、共同経営され、分配も平等で、きわめて高い共同性が指摘できる³¹⁾。

地域には、部落自治組織として長い歴史を持つ契約講があり、6組の契約講に各々長を置き、全体を島長が統括し、漁業を含めた全生活面を共同団結によって相互援助することがう

たわれている。

鯉船の乗組は、かつて島内にいた 2 人の経営者が担い、彼らが女川に転出したあとも、そのもとにおり、もともと江島の政治的結合は名望家による支配であったが、外部との関係においては、実質的には女川の権力に依存していることなどが、述べられている。

論文の最後に、時間や費用、技術が制約されていることから、調査は離島の共同社会の社会構造的形態に向けざるをえず、構造分析によって意識や態度の計測に代えたが、さらに島民の人格構造にいかに関わり入れられ、各々の地位に応じていかなる対応をしているかに関しては、意識調査の必要性が付記されている³²⁾。

(2) 社会変動（町村合併）の実証的分析

昭和 30（1955）、31（1956）年には、文部省の試験研究費の助成を受けて、宮城県白石市で調査が行われた。新明先生によると、「究極の問題は、理論や方法論そのものではなく、総合社会学の立場においてはじめて学問的に研究しうる課題を取り上げてみずからその解決を図るにある。……出来たら社会の変動を現在の日本を中心として実証的材料によって確かめ、デュルケムが自殺論において示したような成果をあげてみたい」との思いで、調査が企画された。具体的なテーマは「地域社会の変動過程——町村合併を契機として——」³³⁾で、この調査は、新明先生自身が先頭に立って、社会学研究室の総力を挙げて取り組み、東北社会学会全体の組織的な共同研究としては画期的なものとなったとのことである。

その後、釜石市、仙台市などで調査が行われていき、農村と都市の両域にわたって変動する社会の実態を、総合社会的に分析していく業績が蓄積されていくことになる。

ところで、昭和 28（1953）年に町村合併促進法が施行され、日本全国で町村合併が進んでいくことになり、地域社会は自然村単位の村から行政都市へと大きく変貌していく激動の時代を迎えることになる。町村合併に関する調査研究は、東北大学のみならず日本全国で取り組まれていった³⁴⁾。

東北大学社会学研究室で行われた町村合併に関する調査報告は、「社会学研究」第 11 号（1956 年）に「町村合併と地域社会」として特集が生まれ、

新明 正道「地域社会の組織化—町村合併の一問題点」

佐々木徹郎「白石市のコミュニティとしての統合について」

佐々木交賢「合併をめぐる一般住民の態度」

長谷川精一「合併以前—旧白石町の場合」

森 博「旧越河村—合併前後の素描」

鈴木 広「旧齊川村の合併はいかに行われたか」

菅野 正「旧大平村の合併事情」

田野崎昭夫「大鷹沢の地域的性格」

斎藤 吉雄「住民の社会参加の様式と合併との関係—旧白川村の場合」

田原 音和「旧福岡村の合併事情」

が収録されている。

鈴木先生は、「旧齋川村」の調査を行っておられ、まず予備調査に、佐々木助教授と森助手と3人あたり、本調査には大学院の長谷川、石川、学部の中野の3君が協力した³⁵⁾と述べられている。それぞれの地域での町村合併の実態に関する調査が、研究室を挙げて行われていった様子がかがわれる。

ところで、旧齋川村では、合併は、行政当事者の問題に終始し、合併の方式に対して村民は無関心で、産業構造も歴史的に伊達家臣片倉領分としてまとまっており、合併は円滑に完了したようである。

ただ、合併前の指導者は農民型の指導者であったが、農地改革前の地主自作層が改革後は自作上層となり、合併後は、関与する地域社会の範囲が拡大し、より近代的な都鄙型の指導者となる傾向が生じて、政治は、停滞的な農村生活から次第に遠くに押しやられていく問題点が指摘されている。

昭和31(1956)年の科学研究費試験研究の2年目の調査では、宮城県遠田郡小牛田町の調査が行われている。その調査報告「水田単作地帯における地主制と村組織——宮城県遠田郡小牛田町調査報告書——」(『社会学研究』16号、1959年)は、鈴木先生と田野崎明夫氏との共同執筆となっている。

この調査報告においても、鈴木先生は、村の指導者層の分析を受けもっておられる。小牛田町では、明治以降、千田家と玉田家の2家が、在村地主として土地を集積し、政治的には、それぞれ政友会と民政党とに結びついて村を二分していた。戦後は農地改革もあり、勢力構造は大きく変化していく。村会議員の階層・派閥の推移をみながら、町村合併後までの指導者の推移が丹念に追われている。

水田単作地域における大地主制という地域的な性格が、耕地の移動を伴う農地改革によって権力構造には変化がみられたが、町村合併は指導層の動向によって決定され、一般住民には大きな関心はみられない。「実質的に合併を実現した指導層は、農地改革後の自作富農で、戦前の地主富農の系譜と対立して、自・小作大衆を組織の中に巻き込むことによって、『階級的』容貌を呈し、それを更に全町の範囲に拡大しようとしている」³⁶⁾と総括されている。

「町村合併を契機とした地域社会の変動」調査は、宮城県白石市、小牛田町のほか、福島県相馬市、新地村、山形県鶴岡市、酒田市、秋田県大雄村でも実施されたようである。

町村合併は、地域社会の自然的統一性を無視して、行政的にこれを破壊し、地域社会を大きく変貌させる契機となった。合併によって引き起こされた課題をいかに解決していくかは、中心的な研究目的であったことは明らかである。

(3) 産業都市の構造分析

町村合併に関する調査研究に次いで、社会学研究室では、昭和32(1957)年から34(1959)年にかけて、「地域社会の近代化に関する構造的機能分析」というテーマで、岩手県釜石市、

青森県八戸市、宮城県仙台市の調査が行われた。

釜石市の調査は、昭和 32（1957）年にとりかかれ、田野崎昭夫、鈴木広、小山陽一、吉田裕の 4 人が討議を重ねて調査の構想を練り、それに基づいて進められていった。昭和 33（1958）年も調査は継続されたが、田野崎氏が中央大学に、鈴木先生も九州大学に転出することになり、調査の続行が危ぶまれたために、中間的な取りまとめがなされた。それが周知の「産業社会の構造分析——釜石市を手がかりに——」（『社会学研究』17号、1959年）である。

本論は、以下のように構成されている。

新明 正道「はしがき」

鈴木 広「分析図式」

田野崎昭夫「経済過程」

小山 陽一「媒介過程」

吉田 裕「政治過程」

田野崎昭夫「結論」

新明先生の「はしがき」によると、町村合併の調査は白石市を対象に行ったので、本調査では、都市化の現象を分析することが主眼とされた。釜石市の調査は、都市近代化の現象をテーマとしていたが、実際に調査に入ってみると、釜石市は産業都市としては特異な性格をもつ都市であることに興味がそそられ、まず、都市の分類が試みられた。

新明先生は、「はしがき」に「関係者が討議を重ねて、釜石市をモデルとして特異な社会過程の図式が成立し、他都市と関係づけるために、都市分類が成立するに至っている。鈴木先生の分析図式は試論的なもので、わが研究室の地域社会調査研究の共通的なものであるとまでは主張できないし、かなりの疑問点があると思っている」³⁷⁾と述べておられ、いささか冷ややかである。

しかし、漫然と地域社会の全貌をとらえてきたこれまでのやり方に比べると、意気込みが十分に感じられ、試論的ながら、この調査研究の理論的な骨組の強さを裏付ける意味はあり、都市の分類も、これまでの分類方式と比較して合理的で、一般の承認を得ることができる。この分類だけでも、釜石市調査研究は、理論的にポジティブな成果を上げていると、評価されている。

田野崎氏によると、釜石市を対象地として取り上げた理由は、①1個の大製鉄所が独占的地位を占めており、比較的単純に社会構造を把握できる、②地域的にみて、社会体系として比較的孤立してとらえられ、したがって他の社会体系との交錯が整理され、統一的に純粹化できる、③しかもとりまく地域社会が後進性をおびているため、構造的にも機能的にも分析対象が把握しやすい、と考えたとある。そして基本的な視点は、消費的生活からではなく、資本から、生産の構造から、都市をとらえていくこと、市民や世帯からではなく、主要な組織体から都市をとらえていくことに置いた³⁸⁾、とのことである。

ところで、鈴木先生は、第1章、「分析図式」の冒頭で、産業都市に接近する場合、まず

①産業都市とは何か、②都市の「何」を分析すべきか、③産業都市の類型の設定にこたえておく必要があるとして、「都市社会」を研究する際に、都市の経済にとって政治がいかに関連しているか、市民の日常生活が都市の政治と経済とをいかに媒介しているか、の実態を知ることが重要であるとして、都市の社会過程は、経済過程、政治過程とその両者を媒介する過程の3つの過程を実証的に研究することにあることを強調しておられる。

そしてその社会過程が、どのような要因によって異なるかを示すためには、まず、都市の類型化が必要であると、都市の成立期によって、

[A] 明治維新以後にはじめて都市的形態を形成した産業都市

[B] 藩政期にすでに都市的形態を示していた産業都市

の2類型を設定し、都市の経済過程における企業の位置によって、

[α] 巨大工場(α工場)が1個あって、都市の経済過程を掌握している型

[β] 複数の工場群が併存・競合的に都市の経済過程を構成している型

の2つを設定して、その組み合わせとして、[Aα] [Aβ] [Bα] [Bβ] の4種類の産業都市が考えられた³⁹⁾。

岩手県釜石市は、この類型化によると、典型的な[Aα]型都市である。

「経済過程」「政治過程」「媒介過程」の分析結果、アソシエーションである釜石製鉄所が、社会構造の下部構造である経済構造を規定し、経済過程の機能が、支配的な影響を及ぼし、コミュニティの動向を規定していることが明らかにされていった。マッキーバーは、アソシエーションはコミュニティの内部から派生してくるもので、コミュニティがアソシエーションよりも優位に立つことを前提としていたが、釜石市ではアソシエーションが優位に立っていたのである⁴⁰⁾。

釜石調査においても、中間まとめを執筆した4人に加えて、研究室所属の学生たちがサンプル調査に協力したことは当然のことで、あとがきに学生たちの氏名が列記されている。

また、釜石調査とほぼ並行して、昭和33(1958)年7月から社会学研究室では、東北地方東部の北上川流域における大規模な共同研究に参加している。この調査は、日本人文科学会が、「生産技術の発展による産業構造の変化と社会生活体制の変動を実証的に究明しようとする」調査研究の一貫で、福武直氏より依頼されて、東北大学教育学部の竹内利美が責任者となって、東北大学の研究者で調査団が組織されて取り組まれた。

新明先生を代表とする社会調査班{A班}には、鈴木広(東北大学)、斎藤吉雄(東北学院大学)、菅野正(福島大学学芸学部)、森博(東北福祉短大)が参加して、「開発と河口都市の変動」を分担し、石巻市を対象として調査が行われた⁴¹⁾。

この共同調査の責任者である竹内利美先生は、鈴木先生によると、まさに調査の熟練工で、どれほど年期を重ねたら先生ほどの境地になれるのかと、大きな影響を受けたと述べておられる⁴²⁾。

4. まとめ「都市研究における中範囲理論の試み」

(1) 東北大学からの旅立ち

釜石調査の取りまとめが行われているさなかに、鈴木先生は九州大学に転出されることとなったが、鈴木先生が東北大学において、何を学ばれ、どのような成果をあげられたかは、釜石調査の理論的総括にみることができる。

『社会学研究』に「産業社会の構造分析」として釜石調査の報告が、特集で発表される直前に、鈴木先生は『社会学評論』9巻3号（1959年）に、釜石調査の理論的総括にあたる「都市研究における中範囲理論の試み——都市共同体論覚書——」を執筆されている。社会学評論に別の者が執筆することになっていたが、書かれなくなり、穴をあけることはできないと依頼され、急遽、先生が論文を執筆することになり、1週間で書き上げたと同ったことがある。

おそらく締め切りが迫っていたので、大慌てで執筆されたのであろう。肝心の産業都市の類型の柱となる産業都市の、成立期の、[A]と[B]の内容の記述が逆になっている。『社会学研究』の特集原稿執筆時には、そのことに気づき、『社会学評論』35号、36頁ではABが逆に示されたが、ここで訂正しておく⁴³⁾と修正しておられる。鈴木先生の初期の主要な論文を集約した『都市的世界』（誠信書房、1970年）に、東北大学時代の総括に当たる「都市研究における中範囲理論の試み」が、第1章に収録されている。この論文の初出が、『社会学評論』であることから、残念ながら、都市類型のABが逆になったままである。

それはさておき、「都市研究における中範囲理論の試み」に依拠して、鈴木社会学の、初期のまとめを試みておきたい⁴⁴⁾。

この論文の前半は、都市研究に関する理論的整理に充てられ、第1節は、「諸概念の予備的考察」で、まず、都市とは法制的な「市」で、法制的な市が、社会的な共同体としての都市社会の1側面として相即しているかどうかを実証的に確定しなければならないとし、共同体は「共同体の基礎問題」（『社会学研究』14、1957年）に示した「一定生産力段階と階級及び生産関係とに基礎づけられ、それと内在的に関連する、人間の自然的適応における、社会構造の地域的統一」と定義づけておられる。

共同体は、多くの集団の機能の累積であり、機能的関連はそこに生きる人々の生活欲求におおむね対応する。その機能的統一が市民の社会意識とどのように絡み合っているかという方向で、都市共同体を実証的に構成することが、本論の課題とされている。

第2節「都市社会学の検討」では、奥井復太郎、磯村英一、鈴木栄太郎の都市社会学が取りあげられている。都市の類型論が位置付けられているか、歴史的発展について解明しているかなど比較検討し、都市社会学にみられる3つの特色は、生態学的説明、病理学的説明、形式・理解社会的理解であるが、3者の都市社会学はいずれも修正が必要であることを指摘しておられる。

そのうえで、「共同体を、現段階における資本主義的社会体制の中で、国家権力によって裏打ちされた階級支配の、地域的な存在形態として把握する」と、「共同体の基礎問題」の

主張が繰り返されている。

第3節が、前述した都市の類型論で、第4節がA α 型都市の社会過程で、釜石調査で議論された、経済過程、媒介過程、政治過程について述べられていく。

経済過程では、都市の中核である α 工場が、少数の経営者層と巨大な賃労働者層との対立で把握され、関連産業の企業群が発生してくる。経済過程の分析の結果、5つの社会的範疇（A、農漁家層、B、 α 企業従業員、C、中小企業従業員、D¹、 α 企業経営層、D²、中小企業経営層）が導き出され、範疇相互の利害関係が明らかになる。経済過程の分析結果で明らかとなった諸要因から、政治過程に集中的に表れるものが市長・市議選挙での投票行動である。

その結果、具体的な行政において、固定資産評価、市財政への融資、道路を中心とする都市計画などの重要問題が決定され、政策執行という形で経済過程に還流する。このようにして、A α 型都市の社会過程は一つの循環を完結することになる。

A α 型都市の分析は、B β 型都市と対比することによって、II型（産業）都市論を構成し、さらにI型、III型、IV型都市との対比を総合することによって「日本都市論」が構成されることになる。「中範囲理論」には、都市の類型論が前提とされているのである。

注釈に、マートン、パーソンズの見解、およびマンハイムの「媒介原理」概念の検討が、中範囲理論の意義については有益であるとも記しておられる。すなわち、この時点での鈴木社会学の到達点が、「中範囲理論」という形で集約されたと考えられよう。

(2) 余録

鈴木先生が、特にマートンを買っておられたことは、この論文のタイトルが「中範囲理論の試み」となっていることからもうかがわれる。

私ごとではあるが、九州大学文学部社会学研究室の学生時代、演習などが行われる「社会学演習室」で自学自習することが多かった。演習室は演習机がロ型に置かれていたが、窓際に大きな演習机が一つ置かれていた。その机には古い英文タイプライターが置かれていた。電動式ではない昔ながらのタイプライターなので、タッチは非常に重かった。コピー機もない時代、読みたい英文雑誌論文は、タイプの練習もかねて、タイピングして複写したりした。

R. K. マートンの『社会理論と社会構造』の翻訳がみず書房から出版され、学生にとっては高値の2,500円で発売された。同じころ、『社会学辞典』（有斐閣）も2,500円で手に入った。どちらを買おうかと迷ったあげく、マートンの本を選択し、その本を持参して演習室で読んでいたある日、突然、鈴木先生が演習室に入ってこられ、「何を読んでいるのですか」と尋ねられた。

「マートンですが、読むのに苦労しています」と言ったところ、「この本は論文集ですから、最後のところに著作目録があります。執筆年順に読んでいったらわかりやすいですよ」と助言してくださった。『社会理論と社会構造』の第1部は社会理論で、機能分析の概念そのものの理解に難航していたので、助言通り、執筆年順に並べると、科学の社会学に関する、

清教主義や17世紀のイギリスの科学と経済のような具体的な事象の分析から読み始めることになり、あっという間に1冊を読み終えることができた。「先達はあらまほしきものなり」とはこのことかと、一人納得した次第である。

のちに、マーソンの『科学社会学 (Sociology of Science)』を翻訳しようと提案され、途中まで進めたが、申し訳ないことに形にすることができなかった。これは苦い思い出である。

[注]

- 1) 「特集 日本社会の現状分析」『社会学評論』34巻2号、1983年。
- 2) 鈴木広「たえず全体化する全体性と、たえず私化する私性」『社会学評論』34巻2号、1983年、160頁。
- 3) 鈴木広『都市的世界』誠信書房、1970年、173頁。

『哲学年報』27輯、1968年、に収録された「土着型社会の流動化をめぐる政治状況——都市近郊地域における生活構造の変質過程——」は、のちに初期の論文を集約して出版された『都市的世界』の第1章に収録されている。

- 4) 森博「社会学研究室小史」『新明社会学とその周辺』(東北社会学研究会)、平活版所(いわき市)、社会学研究新明正道先生追悼特別号、1985年、497頁。

鈴木先生は「東北は、新明先生お一人で30数年おられたのだから、何百人という卒業生は、全部、そのお一人の門下ということになるわけで、これは稀有のことなんですよ。だからみんな仲がよくて、外からは羨ましがられます。先生の人柄もあってね。九大なんか高田さん以来私が8人目の教授ですもんね。その都度、切れちゃうんですね」と述べておられる。対馬貞夫・田原音和・鈴木広対談「総合への意思」『新明社会学とその周辺』(東北社会学研究会)、1985年、397頁。

実際には、九州大学社会学研究室の教授は、高田保馬、蔵内数太、井口孝親、秋葉隆、喜多野精一、内藤莞爾、に次いで、鈴木広教授は7人目である。

- 5) 鈴木広『社会学事始め』(非売品) 2006年、5頁。
- 6) 森博、前掲、503-504頁。

鈴木先生が清水幾太郎の社会学に興味を強くもたれていくのは、東北大学で聴講した清水先生の授業がきっかけで、のちに、九州大学の集中講義に清水幾太郎を呼びたいといわれ、それが実現した時は大変喜ばれていた。

- 7) 対馬貞夫・田原音和・鈴木広対談、前掲、368頁。

「総合への意思」は、昭和60(1985)年3月17日、日本教育会館にて、鈴木広先生と対馬貞夫、田原音和先生との3人が、「新明社会学、見たまま感じたままを語り合う」と対談されたものを、九大社会学科の学生稲元道子、新開昭子、佐藤康子さんがテープ起こしたものがもとになっている。

- 8) 同上、384頁。
- 9) 森博、前掲、508頁。
- 10) 対馬貞夫・田原音和・鈴木広対談、前掲、370頁。

- 11) 同上、377 頁。
- 12) 同上、378 頁。
- 13) 鈴木廣『社会学事始め』6 頁。
鈴木先生は、大学を卒業して函館にもどってくることを期待しておられた母親に対して、申し訳ない
と思っておられたに違いない。また、自分自身が新明先生の言われたとおりに大学院に進学した経験か
ら、九州大学に赴任後、期待された学生に対して大学院への進学を勧められていたようである。ある時
「九州大学というのは不思議な大学ですね、僕が大学院に進学したほうが良いと思う学生は、だれも進
学しませんね」と残念そうに言われていた。たとえば、ある学生は、鈴木先生から大学院に進学して、
T.パーソンズを研究しなさいと言われたが、親が鉄工所を継いでくれと土下座して頼むので、大学院に
進学しなかったと振り返っている。自見榮祐「鈴木廣先生」『鈴木廣先生 追悼文集』（九州大学社会学
同窓会）、城島印刷株式会社、2017 年、10 頁。
- 14) 鈴木廣、同上、10 頁
- 15) 鈴木広「機能的社会理論の展開」『社会学評論』6 卷 4 号、1956 年、33 頁。
- 16) 同上、36 頁。
- 17) 対馬貞夫・田原音和・鈴木広対談、前掲、391 頁。
- 18) 同上、392 頁。
- 19) 鈴木廣『社会学事始め』9 頁。
- 20) 鈴木広「共同体の理論」『文化』第 22 卷 3 号、1958 年、269 頁。
- 21) 鈴木広「解説」『新明正道著作集 第 6 卷 知識社会学』誠信書房、1977 年、524 頁。
- 22) 同上、525 頁。
- 23) 同上、526 頁。
- 24) 対馬貞夫・田原音和・鈴木広対談、前掲、398 頁。
- 25) 鈴木広、前掲、1977 年、527 頁。
- 26) 対馬貞夫・田原音和・鈴木広対談、前掲、386 頁。
- 27) 同上、388 頁。
- 28) 同上、390 頁。
- 29) 三浦典子「鈴木広の社会学 その 1 : 鈴木社会学の概要——九州大学文学部社会学研究室の窓から
Part2——」『やまぐち地域社会研究』19 号、2022 年、71 頁。
- 30) 田野崎昭夫「編集後記」『社会学研究』第 10 号、1955 年。
- 31) 斉藤吉雄・鈴木広・加藤恒子「漁村共同体の分析」『社会学研究 特集 漁村の調査研究』第 10 号、
1955 年、41 頁。
- 32) 同上、52 頁。
- 33) 森博、前掲、511 頁。
- 34) 例えば、福武直と北川隆吉が中心となって東京大学で行われた実態調査の成果『合併町村の実態』
(東京大学出版会、1958 年) に対して、当時、東北大学助手だった鈴木先生は、書評を書いておられ
る。(『社会学評論』9 卷 2 号、1958 年、111-113 頁)

- 35) 鈴木広「旧齋川村の合併はいかに行われたか」『社会学研究』11号、1956年、50頁。
- 36) 田野崎昭夫・鈴木広「水田単作地帯における地主制と村組織——宮城県遠田郡小牛田町調査報告書——」『社会学研究』16号、1959年、20頁。
- 37) 新明正道「はしがき」『産業社会の構造分析——釜石市を手がかりに——』『社会学研究』17号、1959年、4頁。
- 38) 田野崎昭夫「結論」『産業社会の構造分析——釜石市を手がかりに——』『社会学研究』17号、1959年、87-88頁。
- 39) 鈴木広「分析図式」『産業社会の構造分析——釜石市を手がかりに——』『社会学研究』17号、1959年、9頁。
- 40) 田野崎昭夫、前掲、1959年、99頁。
- 41) 斎藤吉雄・菅野正・鈴木広・森博（社会調査班 {A班}）「第3章 河口都市の社会変動」『北上川——産業開発と社会変動——』（日本文科学会）、東京大学出版会、1960年、529-665頁。
北上川調査に先立ち、日本文科学会では、鉾工業都市日立市や佐久間ダムでの調査を実施している。
- 42) 鈴木広『社会学事始め』9頁。
- 43) 鈴木広、前掲、1959年、9頁。
- 44) 鈴木広「都市研究における中範囲理論の試み——都市共同体論覚書——」『社会学評論』9巻3号、1959年、26-40頁。

三浦典子（山口大学名誉教授）

E-Mail アドレス：otani@yamaguchi-u.ac.jp